

日本人画家、藤田嗣治（1886～1968）とキューバ人作家、アレホ・カルペンティエール（1904～1980）は、1929年パリでカルペンティエールがフジタのアトリエを訪れ、知り合いとなり、急速に友情を深めました。藤田43歳、カルペンティエール25歳の時です。藤田は、1913年にフランスに渡り、芸術活動を行い、すでに一定の名声を確保していました。カルペンティエールは、20歳の時から左派の気鋭のジャーナリストとして名をあげており、キューバの独裁者、ヘラルド・マチャド（1925～1933年独裁政治を敷く）に対する抵抗運動に参加し、弾圧を逃れ、1928年からパリで反マチャド独裁活動と作家活動を行っていました。そのとき、フジタは、中南米への旅行の願望があり、その際、キューバに寄りたいため、二人はキューバで落ち合う約束をしました。

しかし、二人がキューバで再会したとき、キューバは、反マチャド独裁闘争が最高潮に達しており、労働組合、共産党、一般市民の革命連合、学生左派がマチャドの退陣を求め、革命的情勢を帯びていました。しかし、フジタはこの時の学生運動の急進的な活動を理解できず、違和感をもったようです。ヘラルド・ムニョスの以下のエッセイは、そのときのフジタの反応に触れています。（編集者註）

レオナルドⁱ・フジタ、キューバ滞在の思い出

浦野保範訳

(I)

偶像破壊(イコノクラスム)主義者のレオナルド・藤田嗣治 (Leonard Tsuguharu Foujita 1886～1968) は、当時のパリ芸術界で特別大きな騒ぎを起こすはずではなかった。そこでは、ロマン主義創造者達の型にはまった習慣があった。ロマン主義者のジェラルド・ド・ネルヴァル (フランスのロマン主義詩人 1808～1855) は、紐で縛った青いザリガニを持って散歩していたし、またダダイストたち(1)は、パフォーマンスで、街の歩行者を侮辱して傷を負わせるような素振りを見せていた。

自画像が必要になる。おかつぱ頭、左耳たぶの金のリング、丸いレンズのメガネ、苺色のズボン、白い靴。彼は、何時間も猫を愛撫する画家と知られていた。カフェでは茶を飲み、声高に詩を朗読した。フジタは、エキゾチックな空間を過ごした。その常軌を逸した空間は、19世紀後半からヨーロッパの多くのところで人々を魅了し、ヘミングウェイが「永遠のパーティー」と名付けたものである。キューバ人のアレホ・カルペンティエール (1904～1980) が、いつ藤田と友達といえる間柄に



なるに至ったのか、あるいは、そのときこの日本の画家といくつかの言葉を交わしただけだったのかは、はっきりしない。ただ、カルペンティエールの「フジタの神話」と題する画家の人物についての印象を述べた記事が、1929年に発行された雑誌「ソシアル」に掲載されている。カルペンティエール自身、記事の中でフジタの楽しい側面について述べている。

『端正なシルエットだ。上品だが西洋人から見ると多少だらしがないようにも見える。しかし、日本人として楽しみ、個性を育んでいるようだ。彼のセーター姿は藍青色の上着を伴い、濃い灰褐色の格子柄のズボンを着用し、時には珍しい上品な燕尾服を着ていた。多くの場合、左耳の耳たぶには金のリングが輝いていた。』

明るい版画の中、私達の作家は、画家の表現力のあるイメージを残している。それは、大きな違いがあるものの、若いけばけばしいサルバドール・ダリ（1904~1989）と近いものであった。カルペンティエールの記事の中に、画家がカルペンティエールにキューバについて、ほのめかしたことが書かれていることも指摘する価値がある。「来年キューバとメキシコに行くつもりだと画家は私達に語った」。意外なことにカルペンティエールは、この年フジタが日本に行ったことと、耳にリングを付け、白いブーツを履いてフジタを真似た多くの日本人がマルセーユ港に毎年到着したことに触れただけでそれ以上は書いていない。記事の調子からすれば、カルペンティエールは、取り繕って、軽業師的、そして真似され易い人気のあるフジタの姿を読み取っている。



て、ほのめかしたことが書かれていることも指摘する価値がある。「来年キューバとメキシコに行くつもりだと画家は私達に語った」。意外なことにカルペンティエールは、この年フジタが日本に行ったことと、耳にリングを付け、白いブーツを履いてフジタを真似た多くの日本人がマルセーユ港に毎年到着したことに触れただけでそれ以上は書いていない。記事の調子からすれば、カルペンティエールは、取り繕って、軽業師的、そして真似され易い人気のあるフジタの姿を読み取っている。

(II)

1932年、フジタは、ブラジル、アルゼンチン、ボリビア、そしてペルーの滞在を含む長いアメリカ大陸の旅を経て、最終的に10月28日ハバナ港に到着した。カルペンティエールがフジタの神話を書いてから3年少々が過ぎていた。フランスに住んでいる日本人画家が、どうしてカリブの、それもキューバに興味を抱いたのか？この動機については、他の芸術家達がキューバを知的創造と発展のための天国として注目していた事実から読み取られよう。アレホ・カルペンティエールの友人ロベール・デスノエス（1900~1945）は、その当時キューバについて『・・・食べ物、海岸・・・そして美しい黒人女性』とすでに書いていた。同様にベルギー人画家(2)、ジュール・パスキン（1835~1930）は、キューバを訪問したあと、島の調和のとれた美しさについてノートに書き留めている。「ハバナは、こじんまりした、静かで、多くの仕事を手に入れる機会がある町だ」。

フジタも同様に、別天地の天国ではないとしても、少なくともエデンの園の片隅を探していた。

首都に到着して数日後にハバナ文化会館でフジタの絵画展が、すでに予定されていた。当時のすべての評価と一致していたように、「唯一の展覧会」と題された、偉大な芸術家であるポルトカレーロ（1912~1985）、レオポルド・ロマニャーチ（1862~1951）、ビクトル・マヌエル（1897~1969）、そしてホセ・シクレ（1898~1974）のキューバ人画家の傑作が展示されていた。フジタがヨーロッパから持ってきた作品がアルゼンチンとブラジルで完売されてしまったため、フジタは、この展覧会のために新たに33点のデッサンと油彩画を描き、5日間展示した。そのため、キューバ人画家の作品は、一旦取り外された。

展覧会の開催にあたってホルヘ・マニャチ（1898~1961）が、開会の辞を述べた。フジタの作品と国家の性格を巡る論争に触れて時間を費やすことはしなかった。

「単に造形面から見ても、フジタの芸術は、私達に正確さと質素、優雅さと繊細さを教えてくれる。しかし、それ以上に、私達の文化が持つ大きな問題に対して、価値ある解決策を示している。一つの例として、どのようにして自らのものを放棄することなく、他者のものに同化することができるかという例を表している。また、固有の自然と文化の要素を失うことなく、国際的な表現様式を創造している。さらに、共通する表現の土台にそれらの固有の要素を、われわれの豊かな独創性として付け加えている。その共通する表現の土台の上で、人は、理解しあい、兄弟となることができるのである」。



フジタは、当初8日間だけキューバに滞在する予定だったが、出発は1ヵ月後となった。フジタのキューバで撮影された写真がある。フジタは、白いグアヤベーラを着て、ラム酒を飲み、踊り、そしてホセ・アントニオ・フェルナンデス（画家1918~）、アントニオ・ガットルノ（画家1904~1980）、ホセ・シクレと腕組みして歩いたものだった。

「狐売りの男」1933

雑誌「ソシアル」に掲載されたフェルナンデス・カストロ（新聞記者1897~1951）の証言によれば、フジタは11月にキューバを離れた。「芸術家は、われわれとあまりにも同じであることを、われわれは、彼の滞在中で学んだ」。寡黙な精神のフジタが、ハバナでの経験をどのように感じたのか、極めてわずかしから分からない。なぜなら、ラテンアメリカ各国での滞在と違って、キューバに関しては書き留めたノートを保管していなかったからである。考えられる疑念の一つに、カルペンティエールは、非常に記事を数多く書き、多作であったが、フジタのハバナへの訪問については、書いていないことがある。フジタがキューバを訪問した後に、カルペンティエールは5本の記事を書いている。ひとつの可能性のある仮説とし

て、この空白に関しては、フジタの正式な年代記を書いたフィリス・バーンバウム（米国人 1945～）によれば、革命的學生運動に対して反対する意見を、フジタが述べていたことがある。

「キューバ訪問中、フジタは、おそらくは、学生の騒乱に反対すると思える見解を表明したのではないか。メキシコの美術家達は、フジタの反革命的声明を知り、フジタをメキシコに向けて出国させようとしたのである」。

フジタの正確な言葉は、キューバのメディアには残されていない。

(III)

ハバナ国立美術館の何人かの職員は、フジタの作品が今も地下倉庫に間違いなくあると言っている。画家フジタのハバナ訪問は、遠く大洋によって隔たれた二つの島、日本とキューバの別の分野での文化交流も行った。フジタを語る時、19世紀の日本人移民と、サン・アレハンドロ美術アカデミーで20世紀初頭に絵画を学んだヒロシ・キンバラ（出生年不詳）を忘れてはいけない。同じく日本人を祖先に持つ、キューバ人哲学者エミリオ・イチカワ（現存、マイアミ在住）は、キューバ人知識人と寿司の間に興味深い関係を見出している。キューバで出版された日本に関する書籍で彼は確たる思いを記述している。

「ほぼすべての文化的キューバ人の好みとして、ここでは寿司、刺身、ワサビは日本食として供されている。これらの日本料理を目の前にすると、真っ赤な炭火で焼く小豚や、香辛料をたっぷりとかけたねっとりとしたキャッサバのキューバの料理を思えば、両国の料理は似ているという意見を皆が認めるかどうかはほぼ疑わしいものだ」。

こうした疑いは当然である。

日本とキューバの間には、ほとんど否定できない文化的結び付（習慣、所作、気質）が存在している。このことは、レサマ・リマ（著名なキューバ人作家 1910~1976）が言う「想像の時代」に位置付けることができるかもしれない。フジタのハバナへの旅は、ラテンアメリカと東洋の間に一つの重要な想像の足跡を残したのである。

2009年7月

ヘラルド・ムニョス

マイアミ、フロリダ

訳者註：

- (1) ダダイスト：第一次大戦末期から戦後にかけてヨーロッパを中心に起こった芸術運動「ダダイズム」の推進者の総称。

(2) ジュール・パスキン (1835~1930) : 原文ではベルギー人とあるがブルガリア国籍。
1920年代パリで生活していた。本名：ユリウス・モルデカイ・ピンカス

i 1955年フランスに帰化後、洗礼名をレオナルド・フジタ (Léonard Foujita) と称した。